

ウォールスタットを使った研究成果を発表

実務者・研究者が集う

耐震性能見える化協会



中川 代表理事

このイベントでは、耐震シミュレーションソフトの「ウォールスタット」を実務・研究者で利用しているユーザーが集まり、検討事例を発表して意見公開を行った。

13日には、角有司氏（宇宙航空研究開発機構「JAXA」安全・信頼性推進部）は、「ウォールスタットとの出会いとロバストデータ同化に向けた取り組み」について発表。自動車業界などでは一

耐震性能見える化協会（奈良県吉野郡、中川貴文代表理事）は12、13の両日、「ウォールスタットカンファレンス2022」をオンラインで開いた。

般的な、ロバスト設計という最適解を導き出す考え方を木造建築で計算してみるという取り組みを中川代表理事との出会いで研究してきたことを報告した。

木造建築は一品もので、地震波も予想困難ななかで多様な地震波に対応するうえで、宇宙開発分野と似ているところがあると角氏は述べ、品質工学や木造建築、スーパーコンピュータの組み合わせの可能性を指摘した。

宇佐美佳那氏（コシイプレザービング）は、「耐震等級3の構造安全性に対する腐朽・蟻害による劣化の影響」について発表した。同社では、これまで71棟の住宅を解体調査し、劣化した接合部のデータを集め、健全な状態の木造2階建て

住宅と接合部が劣化した木造住宅のモデルについて、JMA神戸の地震波3回でシミュレーションを実施。腐朽による耐震性の違いを検証した。

名古屋を拠点にした木造建築技術者集団ア

ウェアの椿田竜也氏は、壁量計算では見えてこない筋違耐力壁の筋違の向きや耐力壁の配置バランス、上下階の耐力壁の配置などで耐震性能の違いをウォールスタットで検証した。

中川代表理事は、「2日間にはわたるカンファレンスでウォールスタットの様々な活用の仕方が示された。協会としては、今後もこのような機会を設けていきたい」と話している。